

事件名 強盗未遂被疑事件
被疑者 ○○○○

意見書

令和○年○月○日

福岡地方検察庁 検察官 ○○○○ 殿

弁護士 福岡 九州男

上記被疑者に対する頭書事件について、その処分に関して、以下のとおり意見を述べる。

第1 はじめに

被疑者についての本件被疑事実については、被疑者が被害者に対してナイフを示して脅迫してはいるものの、①その脅迫の程度・態様は被害者の反抗を抑圧するに足りるものとは評価できず、②被害者の意思が介在する形で任意の支払いを求めた行為態様であることから、恐喝未遂として家庭裁判所に事件送致されるべきである。

以下、強盗罪と恐喝罪の差異について論じた上で、それぞれについて詳述する。

第2 強盗と恐喝の差異について

1 強盗は、人の反抗を抑圧するに足りる暴行又は脅迫を加えて、人の財物を強取する行為（または財産上不法の利益を得、もしくは他人をしてこれを得させる行為とこれに準ずる行為）である。

一方で、恐喝は、暴行又は脅迫を手段として人を畏怖させ、財物（又は財産上不法の利益）を交付させる行為である。

このように強盗と恐喝は、いずれも暴行又は脅迫を用いて財物又は財産上の利益を得る犯罪という点で共通している。

2 この強盗と恐喝の差異としては、まず、①暴行又は脅迫が、社会通念上一般に被害者の反抗を抑圧するに足る程度のものであるかどうかという客観的基準によって決せられるとされている（最判昭和 24 年 2 月 8 日刑集 3 卷 2 号 75 頁）。

恐喝罪の場合、被害者の意思が介在して、財物又は財産上の利益を取得するところに犯罪成立の核心があるのであるから、被害者の反抗が抑圧される程度の暴行又は脅迫がなされれば、そこにはもはや被害者の意思が介在するとはいえず、被害者から交付を受ける外観を呈していたとしても強盗罪が成立する。

3 但し、仮に暴行又は脅迫が被害者の反抗が抑圧される程度の暴行又は脅迫であったとしても、②被害者の意思が介在する形で任意の支払いを求めた行為態様であれば、強盗罪は成立せず、恐喝罪が成立する。

例えば、暴行又は脅迫によってその場で被害者の反抗が抑圧されても、加害者がなお被害者の任意の交付を待ち、後日の履行を求める場合は、強盗罪は成立しない。

4 本件においても、かかる強盗と恐喝との差異の基準を踏まえて、強盗罪が成立するか否かを検討する必要がある。

第 3 ①被害者の反抗を抑圧する程度の脅迫であったか否か

1 まず、本件では被疑者はナイフを示して被害者を脅迫しており、この脅迫行為が客観的にみて社会通念上一般に被害者の反抗を抑圧するに足る程度のものではあったかどうか問題となる。

その検討に当たっては、単に刃物を用いているという態様だけで判断することはできず、被害者と加害者の性別・年齢、犯行場所の状況・時刻、加害者の服装・態度・数、被害者と加害者との関係等の具体的事情を総合考慮した上で客観的に決することになる。

2 被害者と加害者らの関係

この点、本件でもっとも特徴的なことは、そもそも被害者と共犯者 A とは、いわゆる愛人契約を締結しており、被害者が A に対して月額 30 万円支払う約束をしていたことである。

すでに 3 回も性的関係を持ったにもかかわらず、1 円も支払われていない状況が続いていたものの、本件犯行直前にも、被害者は A に対して一定の金額を

支払う旨伝えていた。

また、被害者のとった行為は買春行為であって、売春防止法第 3 条に違反する違法な行為である上、仮に当初から「やり逃げ」、すなわち金銭を支払うつもりがなく A を騙して性行為に及んでいたのであれば、刑事上の詐欺罪に該当する可能性もある上（名古屋高判昭和 30 年 12 月 13 日判時 69 号 26 頁）、民法上の不法行為に該当するし、何よりも家族も含めた周囲の評価・信用が失墜することになる。

A 側において被害者の「やり逃げ」を許すつもりがないという姿勢を被害者に見せれば、自らの利害得失を考えて約束していた金額の支払いに応じることが十分考えられる関係性だったのであり、かかる関係性にあったことは本件で強盗の成否を判断するに当たって極めて重要な事情と言える。

3 被害者への金銭要求についての野木及び被疑者の意図

かかる関係性を前提に、A が元同級生の被疑者に頼む形で被疑者が本件に関与したのも、被害者による「やり逃げ」を許さずに、任意に支払うといていた愛人契約の対価の支払いを確実なものにしようとする意図からであって、それ以上に金銭を奪取したり支払わせたりしようという意図はなかった。

したがって、仮に被疑者が出ていく前に被害者が A に任意に金銭を支払っていれば、そもそも被疑者が出ていくつもりなどなかったのである。

また、本件犯行現場付近で被害者に近付いて行ったのも、まずは A 側で第三者が関わってきているということを被害者に理解させ、このまま「やり逃げ」を許すつもりはないということを被害者に示すことが目的であった。つまり、被害者を畏怖させる意図はあるにしても、あくまで被害者に状況を理解させて任意に支払わせようという意図での行動であったことは明らかである。仮にこの時点で被害者が支払いに応じていた場合、害悪を告知するような発言があれば恐喝になりうるとしても、そのような発言がなければ恐喝罪にすら当たらなかった。

しかし、第三者の若い男性が姿を現したにも関わらず、被害者がとぼけた態度をとったために被疑者はナイフを取り出してしまっているが、上述したような関係性や直前の経緯からすれば、このようにナイフを取り出して示した行為は、より強い姿勢を見せて任意に支払わせるために畏怖させた行為であると社会通念上一

般に評価できるのであって、反抗を抑圧するに足る脅迫と一足飛びに評価できるものではない。

4 加害者の数・性別・年齢等

本件では、被害者が 1 名であるのに対して加害者は被疑者と A の 2 名である。しかし、そのうち A は 10 代の女性であり、被害者から騙され、いわば性的搾取の対象とされていたような関係性であって、被害者に対する脅迫において被害者の畏怖を強めるような立場にはない。

5 被害者の性別・年齢

一方で、被害者は 25 歳の男性であって、18 歳である被疑者との間にそこまで極端な力や体格差があったわけではない。

6 犯行場所の状況・時刻等

次に、犯行時刻は午後 11 時 30 分であり、犯行場所は人目につかない場所であったことはたしかである。

しかし、少し歩いたところには人家が立ち並んでおり、人家に駆け込むなり大声を上げるなりすれば助けを求められるような場所でもあった。

7 犯行時の被疑者と被害者との位置関係

また、被疑者と被害者との位置関係としては、一番近付いたタイミングでも 2 メートル程度離れており、被疑者が手を伸ばしてもナイフが被害者に当たるような位置関係ではなかった。

A と挟み撃ちにして逃げられないようにしていたわけでもなく、実際に被害者はそのまま後方に逃げ出すことができている。

8 本件犯行時の被疑者の具体的な言動

また、本件犯行時の被疑者の言動としては、上述していたような位置関係でナイフを取り出して被害者に示しただけであって、特に被害者にナイフを突き付けたりしたわけではない。

その状況で、約束していたお金を A に支払うように促す発言はしたものの、それ以上に被害者に対して害悪の告知をしたわけでもない。

加えて、被害者が逃げ出した後も、特に被疑者は被害者を追いかけるような行動には出ていない。

このような本件犯行時の被疑者の具体的な言動からしても、被害者の脅迫行

為が被害者の反抗を抑圧するに足りる脅迫であったと社会通念上一般に評価することなどできないことは明らかである。

9 小括

以上のような具体的事情を総合考慮すれば、被疑者の脅迫行為について被害者の反抗を抑圧するに足りる程度の脅迫であったと客観的に評価することなどおよそできないことは明らかであり、強盗未遂の非行は認められない。

第4 ②被害者の意思が介在する形で任意の支払いを求めていること

1 百歩譲って、脅迫そのものについては被害者の反抗を抑圧するに足りる程度の脅迫であったと客観的に評価できるとしても、本件において被疑者は、あくまで被害者の意思が介在する形で任意の支払いを求めているのであって、いずれにせよ強盗未遂罪は成立しない。

2 まず、第3の2項及び同3項で詳述したとおり、被疑者としては被害者がAに約束した金銭の支払いを任意にするよう求めているのであって、任意の支払いの確約がとれるのであれば、その日のうちに支払いを受ける必要はなかった。したがって、仮に現金の持ち合わせがなく、その場では支払えないということであれば、いつまでにどのように支払うかの確約をとった上で、被害者の身元を確認するなどして再び態度を翻すことを防ぐような措置さえとればよいと考えていた。

しかし、第2項でも指摘したとおり、そのような経過で現金が支払われた場合には、これを強盗と評価することはできないのである。

3 被疑者としては、Aと被害者とのもとの関係性を前提に、被害者からAに約束とおりに金銭を支払わせようとしていただけなのであって、仮にその途中での脅迫の態様が被害者の反抗を抑圧するに足りる程度のものとなってしまったとしても、あくまで被害者の意思が介在する形での任意の支払いを求めている以上、強盗未遂の非行は認められない。

第5 結論

以上のとおりであり、被疑者については強盗未遂の非行は認められないのであり、恐喝未遂として家庭裁判所に事件送致されるべきである。

以 上